

## 修士論文の和文要旨

研究科・専攻	大学院 電気通信学研究科 人間コミュニケーション学専攻 博士前期課程		
氏 名	千葉 健司	学籍番号	0636014
論 文 題 目	マルセル・デュシャン『泉(Fountain)』への記号学的一考察		
要 旨			
背景			
<p>芸術作品とは何なのか。「男性用小便器」を展示した作品『泉(Fountain)』(1917)は私が知る有名な作品(ピカソ『アヴィニヨンの娘たち』や『ゲルニカ』など)を抑え「20世紀で最も影響を与えた芸術作品」の第1位に挙げられた(2004年イギリスでの調査)。この結果は私が持っていた芸術作品に対する考えを懐疑的にし、アンデルセンの「裸の王様」の世界を想起させた。元々芸術作品が持っていた伝達機能の役割を失った現代の芸術作品『泉』を前にして私たちはどのように解釈できるのだろうか。</p>			
目的			
<p>本研究はマルセル・デュシャンの生涯や彼が残したすべての作品を扱うデュシャン研究ではない。また記号学に対して特別な示唆を与えようとするものでもない。本研究の目的とはデュシャンの『泉』という作品を「記号学」によって解釈することであり、それは従来の『泉』研究において正面から行われていないであろう分析方法の実践だといえる。</p> <p>本研究の結果として『泉』への新たな解釈が見出せるか、「記号学」が方法論として新たな可能性を持ちうるか、この二点が副次的な狙いである。</p>			
方法			
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 共時態と通時態からみた「レディ・メイド」の意味変化。</li><li>・ ラングとパロールの観点からみた『泉』分析。</li><li>・ 3人の作者がいる『泉』に対して作者の像はどのように設定すべきか。</li><li>・ 記号モデルを用いた分析。</li></ul>			
結論			
<p>芸術作品とは何なのか、それは「選択」の結果である。アレナス(1998)によると芸術作品の制作という行為はそれ自体では何の意味も持たない素材を用いて、意味ある形を生み出していくことだという。これを換言すると芸術作品はすべて「選択」の積み重ねだといえる。そしてこれはレディ・メイド作品『泉』に限っていえることなく写實的、抽象的作品など様式の枠組みに囚われることなく、画材や色、構図といった「選択」が行われていることを示している。ただしレディ・メイド作品はモノが置かれる《環境》に依存し、美的コンテクストの下でのみ発現する。これこそ他の芸術作品には見られないレディ・メイド特有の性質である。</p> <p>最後に、レディ・メイド作品『泉』の仕掛けとは意味の一義性、記号の自立性を脅かして既知の実用的な面と未知の美的な面の間に裂け目を入れることであり、それによって私たちが暗黙のうちに信じていた美的知識や認識という幻想を暴き、意味を空転させることだといえる。</p>			